

聖堂での献呈

旅立つ我々に呪いの花束は捧げられた
動脈血よりも鮮やかな赤い花
これを血管にすり込むならば
我々に荒野の干からびた地面は見えぬであろう
降り注ぐ黄色い針は感応となるであろう
夜毎の抱擁は我々を貫くであろう

新たなる時に地は広い　　広すぎる
この花束は我々を温室の中へ守るのだ
今、呪われた花束を私は受け取る
そして傍らの人はその香をうっとり嗅ぐ
これで我々は肉体を彼方へと葬った
ああ、呪われた花束をありがとう

(1982.5.4)